

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 7 日現在

機関番号：22401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25463484

研究課題名(和文) 親のケア能力・子どものセルフケア能力獲得を支援する看護師の教育・指導力の促進

研究課題名(英文) Improving nurses for leadership and educational support for children's self-care and parenting caring abilities

研究代表者

添田 啓子 (soeda, keiko)

埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授

研究者番号：70258903

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：地域中核小児医療施設と大学の共同研究として、オレムセルフケア不足理論を用いた看護師への教育介入(事例検討とリフレクション、ワークショップ、記録監査の作成実施)と、看護師の認識変化の調査を行った。

意識調査の回収率は70.9%(回収数/配布数280/395)、理論を看護過程に意識的に取り入れているは約半数であった。リフレクションから「オレム看護計画で子ども・親の力を伸ばす実践ができている」「子どもの力を支援できうれしい」「直接仕事の課題解決につながった」等《看護実践の変化》が抽出された。今後は事例検討会ファシリテーターの教育、看護記録・アセスメントの充実に向けた教育的介入の発展が必要である。

研究成果の概要(英文)：The regional pediatric hospital and university conducted collaborative research on educational intervention for nurses based on Orem's theory of self-care deficit. The intervention included case studies and reflection, workshops, and audits of nursing records. Researchers investigated changes in nurses' recognition post-intervention.

The response rate of the survey was 70.9% (289 of 395 administered questionnaires were returned). Approximately half of the participants deliberately incorporated the theoretical concepts in their nursing processes. Introspective opinions regarding changes in nursing practices were extracted from case studies such as, "I feel like I'm empowering parents and children to use Orem's nursing plan" "I'm happy to be able to improve children's self-care skills". These findings suggest that there is a need to develop educational interventions that focus on training of facilitators for case studies and enhancing assessment and recording of nursing processes.

研究分野：医歯薬学

 キーワード：小児看護学 セルフケア不足理論 組織的教育介入 こどものセルフケア能力 親のケア能力 事例検討  
 リフレクション 記録監査

## 1. 研究開始当初の背景

核家族化や少子化により、家族のケア能力は低下しているが、入院の短期化から在宅ケアが増加している。子どものセルフケア能力と家族のケア能力獲得を支援する看護師の教育機能を高めることが重要となっている。オレムはセルフケアを人が日常生活の中で生命や健康を維持し安心感を継続するため自分自身で行なう活動で、人はこれを学習して意図的に行なうようになると述べた<sup>1)</sup>。小児看護では子どものセルフケア能力と親のケア能力が不足する場合、これらの能力を補い、獲得を支援する<sup>2)</sup>。

本研究では小児看護実践にセルフケア理論を取り入れることを、家族参画を進め、子どものセルフケア能力の発達・家族のケア能力の獲得を支援し、日常生活援助、療養支援を看護として意図的に行なう。また、組織として理論を取り入れ一貫性のある継続した看護サービスを提供する<sup>3)</sup>こととして捉えた。

上記の考え方を小児看護実践に取り入れることは、我が国の現在のニーズに対応する変革と言える。

この研究は地域中核小児医療施設看護部と研究者らの共同研究により、施設の看護実践にセルフケア理論を取り入れる組織的教育介入を行う研究である。平成19年度からセルフケア理論の看護スタッフへの教育的介入と組織の変革を検討実施し、子どもと家族のケア能力向上を支援する看護師の実践能力の向上を目指した研究を行ってきた<sup>4-5)</sup>。平成21-24年基盤研究C(課題番号21592814)「親のセルフケア能力、子どものセルフケア能力獲得を支援する看護師の教育・指導力の形成」教育介入により、アセスメントツール・理論を用いた看護過程ガイドを作成、標準看護計画を作成・電子化、平成25年度からは実践段階となる。

## 2. 研究の目的

理論を用いた看護計画を使って子どもと家族を療養の主体としてセルフケア能力・ケア能力を引き出す看護支援が行われるよう、事例検討とリフレクションにより、実践の変化を促進する。介入の効果を検証するため、看護記録の変化を確認するとともに、実践段階における看護師の認識の変化を明らかにすることを目的とする。

## 3. 研究の方法

実践段階の研究計画として、地域中核小児医療施設の看護師への教育介入とその効果の検証を行う。

### (1) 教育介入

合同プロジェクト(以下合同Pとする)で事例検討・リフレクション<sup>6-7)</sup>を行う。事例検討の討議およびリフレクションにより患者・家族のセルフケア能力を引き出すための看護実践がより進むように働きかける。また、合同Pメンバーが学んだことを部署の活動と

して展開、部署の活動を合同Pに報告する。合同Pが企画する集合形式ワークショップ(以下、集合形式WSとする)で部署の活動を報告し、施設内で共有する。

### (2) 効果の検証のためのデータ収集

合同P会議録、資料、事例検討・リフレクションの記録、集合形式WSの会議録・資料・アンケート。施設看護師の意識をとらえる質問紙調査、看護記録の変化を捉えるツールを作成し、調査する。これらのデータを分析し、変化を捉えて効果を検証する。

研究参加者：地域中核小児医療施設の看護師

### (3) 倫理的配慮

本研究は、埼玉県立大学倫理委員会(25002号)と埼玉県立小児医療センター倫理委員会(2014-02-016)の承認を得て実施した。

## 4. 研究成果

### (1) 教育介入の活動：

合同P

会議は平成25-27年度に計23回を行った。

事例検討会

事例検討会平成25-27年度に計19回を行った。

平成25年度前半は標準看護計画作成検討会とし、問題点・目標・計画の表現や内容について、子どものセルフケア能力と家族のケア能力を引き出し、家族に提示できる計画を検討作成した。どのようにして思考の転換を進めるか検討した。後半は、標準看護計画を個別の計画に修正するため事例のアセスメント、問題・目標・計画の検討を行った。平成26年度 実際の9事例で事例検討を行い、乳児期1例、幼児期6例、思春期・青年期各1例であった。内容は複数の医療的ケアが必要な児の親のケア能力を高める支援、治療を乗り越える子どものセルフケア能力と家族のケア能力を高める支援、発達支援、家族の不安が強くサポートが少ない事例など困難事例であった。

平成27年度 実際の8事例で検討を行い、新生児期1例、乳児期1例、幼児期4例、思春期2例で、急性期や外科事例でも事例検討を行った。内容は健康逸脱・発達上・家族の課題が大きい困難事例で、極小低出生体重児や先天性心疾患の術後等、厳しい身体状況の中で子どもと家族の能力を高める支援、在宅に向けた調整、治療や障害による影響を乗り越える支援が検討された。

合同Pメンバーの自部署の活動として、部署ごとの事例検討会(学習会を含む)平成25年述べ15回、平成26年22回、平成27年30回+が行われた。各部署の活動成果は集合形式WS(年1回3月)で報告された。

集合形式WS

部署内での子どもと家族の力を伸ばす看護の取り組みの成果を共有することを目的にH25-27年に3回(各年度1回)実施した。対象者は、合同P・他委員会メンバーと各部署3名以上の参加とし、参加者はH25年から順に64名、69名、71名(大学教員含)であった。各部署から「子どもと家族の力をのばす看護として行っている事例や取り組みとその成果、今後の課題」について発表し、その後、全体討議を行った。WS後にアンケートを実施した。

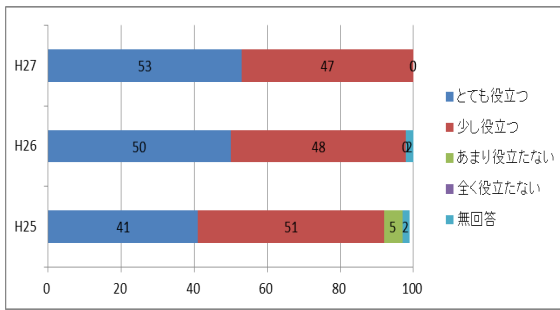


図1 今回のWSが臨床現場で役立つと思いますか(%) アンケートの結果「今回のWSが臨床現場で役立つと思いますか」(図1)では、各部署の取り組みを集合形式WSで発表・共有することで、臨床現場に「とても/少し役立つ」とした肯定的意見が増加している。アンケートの自由記述から「各部署の取り組みが参考になり、自部署の活動に生かしたい」(22名)、「子どものセルフケア能力と家族のケア能力を看護記録に記述することの必要性が認識できた」(11名)の意見が見られた。各部署の取り組みや成果が共有され、看護展開に生かす実感につながり、標準看護計画導入後、WS参加意識が課題解決へ向けた実践的な看護展開検討へと変化してきているものと考えられる。

## (2) リフレクションからとらえた看護実践の変化

**データ収集:** 合同P会議のメンバーでリフレクションを27回実施し、子どものセルフケア能力・家族のケア能力の獲得を支援する看護実践の変化、普段の実践の振り返りについて語ってもらった。

**分析:** リフレクションは承諾を得て録音し、逐語録を質的記述的に分析した。

**結果:** 平成25-26年度のデータから子どものセルフケア能力・家族のケア能力の獲得を支援する看護実践の変化は、4個のカテゴリー、12個のサブカテゴリーが抽出された。にカテゴリー、<>にサブカテゴリーを示す。オレム理論の導入・促進により、<部署内が子どもと家族の力を援助したい思いに変化>し<治療経過に合わせて子どものセルフケアを支援する看護を検討>するなど、看護師の認識の変化が生じていた。また、<オレム看護計画で個別に合わせた看護が実践<子どものがんばりを支援し、力を伸ばす実践ができています>など、子どものセルフケア能力・家族のケア能力獲得を支援する看護実践の変化が進んでいた。

<オレム看護計画の実践で家族のケア能力が向上し家族が退院後困ることがなく、状態が安定している><かわりによって子どもの力が引き出せた>と実践の変化による成果を感じていた。部署の課題として、アセスメントを記述する力が必要であることや、<短期入院・急性期・外科では子どもの個別の状況に合わせた看護展開が難しい>ことが抽出された。

平成27年度は、各部署で電子カルテ上の事例検討が進められ、<オレムってこうなんだとわかってきたとみんなから意見をもらった><子どもの能力の見極めが大切とみんなで共通理解できた><発想・思考の転換ができるようになった>と部署のメンバーの認識の変化が語られた。また、事例検討を継続することで<子どもの回復過程が捉えられた><この子どもの力をどう引き出すことができるか計画を検討でき、子どもを支援できてうれしい>等、直接的に実践上で成果があり看護実践の変化に喜びを感じる語りが抽出された。さらに記録について、<次の人にも子どもの能力や行った看護が伝わる記録が大切とわかった><個性のある計画に修正できた><記録の情報やアセスメントが増え、できることに視点を向けるオレムっぽい書き方になってきた>など看護記録の変化が抽出された。

今後の課題としては、<本当に子どもと家族の力をアセスメントできたのか、まだ弱いところがある><事例検討はファシリテーター次第><ファシリテーターとなるリーダー層の教育が大事><さらに記録・アセスメントを充実させたい>が抽出された。

**考察:** 結果は、電子化されたオレム看護計画の活用や部署での事例検討、オレム理論の視点を取り入れた記録監査表の導入など、継続的な教育介入と活動の効果と言える。特に平成27年度は看護部の指導により施設全体の取り組みが強化され、各部署で電子カルテ上の看護計画や記録を検討・修正する事例検討会が継続的に行われた。さらに記録監査表にオレム理論を取り入れたことで、実践の変化が促進されたと言える。特に部署での事例検討会を電子カルテ上の記録・計画で行ったことは、アセスメントが抜け落ちやすい電子カルテの弱点を克服する工夫として有用であり、実践と記録を看護過程としてつなぎ、看護の成果を上げる上で効果的と言える。

今後さらにオレム理論を用いた看護実践を発展的に促進するためには、子どもと家族の力の捉え方(特に急性期や展開の速い外科系)の強化、事例検討会を効果的に促進するファシリテーターの教育・育成、記録上のアセスメントの充実、記録監査表を用いた記録の充実を図る教育介入が必要だと考える。

## (3) 事例検討会による参加者の認識の変化

**事例検討会実施:** 平成26年7月~28年2月に事例検討会を6回、計9事例を検討した。事例検討会では、オレム理論の視点でのアセスメント、全体像の作成、看護目標・問題・計画の検討を実施した。最後にリフレクションを実施した。

**データ収集・分析:** 参加者の承諾を得て事例検討会を録音し、検討会記録を作成してデータとした。また、リフレクション内容も録音し、逐語録を作成してデータとした。事例検討会記録とリフレクション逐語録のデータを質的記述的に分析し、事例検討会によって、参加者が得たこと・参加者の認識が変化したことを事例検討会の成果として抽出した。

**倫理的配慮:** 事例検討会参加者に、研究内容と自

由意思での参加、プライバシー遵守を口頭と文書で説明して同意を得た。事例は個人情報削除、検討に必要な内容は抽象度を上げ、資料は会議後回収した。データは抽象度を上げた記載とし、毎回確認した。

#### 結果：事例検討会の概要

事例は乳児期1例、幼児期6例、思春期2例で1か月以上の入院患者であった。選択理由は、家族の不安が強い、思春期患者の自立促進の必要性など、事例提供者が困っている事例が多かった。

検討内容から得たこと・認識が変化したこと

事例検討会とリフレクションから抽出された意味内容を「 」で示す。

a. 骨系統疾患で骨延長中の思春期の患児

検討内容：1回目は「家庭での生活と周囲のサポート状況」「(骨延長器挿入しながらの)家庭と学校生活を想定した準備状況」など、現在ある情報を元に検討し、さらに意図的な情報収集の必要性が確認された。そして、「思春期の兄と地元校の友達のつながりを維持する支援の必要性」や「辛い治療を選択した兄を見守る看護の意味」、「ボディイメージ変容やリハビリへの看護の重要性」などが検討された。2回目は前回の不足情報を追加し、「骨延長に重要な栄養の偏りと家族の認識不足状況」「家庭生活と学校生活で必要なセルフケアと支援方法」「安全な日常生活や周囲のサポート体制、栄養管理を含めた看護目標」の検討がされた。

得たこと・認識が変化したこと：リフレクションから、「今の問題を中心に考えて、退院後が見えていないと気づく」「普段の思考と比較して情報が少なかったところから退院後を見据えて早期から関わる必要性に気づく」などが抽出された。

**考察：**セルフケアの視点での事例検討会では、参加者が患児と家族の現在ある課題しか捉えることができていなかったことや、退院後の生活をイメージしたセルフケアを促す大切さへの気づきがあった。そして、部署での事例カンファレンスの開催や、検討内容を生かした看護の展開がされていた。これは、実際事例で系統的に子どもと家族の能力をアセスメントし、支援や看護目標作成の思考過程を複数で行ったことで、参加者の視野が広がり、思考の自信につながったからと考える。そして、改めて子どもと家族の両者に働きかけて発達を促す、セルフケア能力向上を促すという、小児看護の意義の気づきにもつながったと思われる。

#### (4) 意識調査

**データ収集：**A地域の小児医療中核施設内の看護師400名を対象に無記名自記式質問紙調査を行った。調査項目：オレム理論の認知度と看護過程への活用、情報共有方法、オレム標準看護計画・ガイドブックの活用の全8項目。データ分析：調査用紙を点数化し、記

述統計を行い、2検定またはMann-WhitneyのU検定を用いた。統計分析にはSPSS ver21.0を用い、有意水準は5%とした。自由記述回答は内容を質的に分析し、 を合わせてオレム理論の看護実践への活用状況と、内科・外科、平成24度の調査結果との比較から教育的介入の効果を抽出した。

**結果：**質問紙回収率(回収数/配布数)70.9%(280/395)、有効回答率70.6%(279/395)であった。対象特性は看護経験年数の浅い看護師が1/3を占めていた。オレム理論の認知度として、「ほぼ内容を理解している」「概要や特徴を知っている」と回答したものは約半数であり、これは平成24年度の調査結果と比較して有意差は認められず、オレム理論の認知度に変化は無かった。これは、看護経験年数の浅い看護師が約1/3を占めており、勉強会への参加の機会が少ない事が要因と考えられた。オレム理論の看護過程への導入と活用では、看護過程に「意識的に取り入れている」と回答したものは約半数で、看護過程のすべての項目において「子どもの発達状況」で有意差があった。

**考察：**小児の看護師は親のケア能力と子どものセルフケア能力を高める支援において、子どもの成長発達への支援が大きな割合を占めていると認識しており、これは平成19年から行っている組織的教育介入の効果の一つとして考えることができる。また、中でも看護計画の立案は、約7割が意識的に行っており、他の項目より有意に高く、平成25年度のオレム標準看護計画の導入(電子カルテ化)後約1年経過し、日々の看護実践に浸透している事が明らかとなった。しかし、情報の共有方法としてガイドブックの活用は約1割程度にとどまっております。今後の課題として残された。内科・外科系の比較では、「オレム標準看護計画の活用」について、内科系の方が有意に活用していた。また、自由記述では、「使いにくい」と回答しているのは、外科系が多く、「急性期の患者には適さない」と感じており、外科系は短期入院患者が多いことから活用の難しさが示唆された。今後は、ガイドブックを用いた教育研修や、内科外科等の疾患の特徴を踏まえた事例検討会等を実施していきたいと考える。

#### (5) 記録監査表の作成と記録監査実施

**方法：**平成26年3月-28年1月に実施。オレム標準看護計画導入前後の看護記録の比較：長期入院患者3事例の看護記録から子どものセルフケア、親のケア能力にかかわる記録を抜粋・転記した。その内容を質的に分析し、監査表を作成した。作成過程で看護部、記録委員会、合同Pメンバーと7回検討し、プレテスト(12名の監査者が同一事例を1回)を実施、監査者より監査表に対する意見を集約し、その内容を量的・質的に分析した。 をふまえ監査表を修正、全部署による記録監査を2回(11月患者3名×8病棟、1月患者8名×8病棟)実施した。

**結果：**オレム標準看護計画導入前後の看護記録の変化：問題・計画立案では、導入前は症状や病態、患者の苦痛等に関する問題志向型の表現であ

ったが、導入後はほぼオレム標準看護計画を使用し、子どもと家族を主体とした表現に変化していた。しかし、情報収集・アセスメントは、導入前後で変化無く、子どもや家族のケア能力に関する情報は記述されているものの、看護問題の根拠となるアセスメントの記述は少なかった。また、経過記録は、導入前後ともに、事実の記載に留まり、アセスメントや計画に対する評価が少なく、その後の問題立案・修正に反映されていなかった。以上を検討し、アセスメントを重視し且つ実践が評価・計画へと反映される監査表(情報収集2項目、アセスメント6項目、問題・計画立案5項目、問題・計画修正1項目、経過記録4項目の計18項目とし、各項目0~3点)を作成した。

プレテスト結果：合計得点9~37点で平均24.25点(SD±8.02)、中央値24.5点、Shapiro-Wilk検定によりP値0.104にて正規分布が確認された。2標準偏差内にすべてのケースが含まれていたため、全てを分析対象とした。各項目の比較として得点率は、情報収集52.8%、アセスメント13.4%、問題計画・立案65.0%、問題計画・修正30.6%、経過記録66.7%であり、アセスメントの得点率が他の得点率より低かった。また、監査者の意見から、用語や評価得点幅の解釈の不明瞭さ、全体の項目数に対しアセスメント項目の多さにより、総合得点が低いことがあげられた。以上を踏まえ監査表を修正した。

監査表をループリック形式とし用語の表現と評価基準を明確にし、監査者のフィードバックと自己評価もできるように変更した。また、アセスメント項目の割合を全体の33.3%から29%へ修正した。監査表の最終版は合計得点81点(100%)(うち加点6点)：情報収集6点(7%)、アセスメント24点(29%)(うち3点は加点)、問題・計画の立案27点(33%)、計画の追加・修正9点(11%)、経過記録15点(うち加点3点)(18%)、作成した監査表で2回(11、1月)監査を実施した。監査結果は、総計41点/81点(得点率50.7%)、総計46.3点/81点(得点率57.8%)、アセスメント11月8.1点/24点(得点率33.7%)、1月9.9点/24点(得点率41.4%)と上昇していた。

**考察：**山勢ら<sup>8)</sup>は看護師の電子カルテの有用性に関する全国調査で電子カルテシステムが思考を伴う診断やアセスメントに役立つ認識が薄いと述べている。これは、電子カルテでは思考を伴う記録部分が抜け落ちやすいことを意味し、意図的にアセスメントを記述する重要性が示唆された。また、時間的余裕の無さや、教育・研修不足等<sup>9-10)</sup>が影響していることも要因として考えられる。よって、看護実践の質を促進する上で、アセスメントに基づく計画、実施評価、修正の記録がなされること、さらに、看護過程におけるアセスメントを重視した実践の妥当性の評価(自己評価・他者評価)と記録者へのフィードバッ

クが重要であり、ループリックを活用することで、その効果が期待できると考える。今後は、監査結果を踏まえた教育研修の実施等に活かしていきたいと考える。

## (6) 集合形式WS

**データ収集：**平成22年度WS討議内容と平成25・26年度WS発表・討議内容から標準看護計画電子化導入前後の看護師の認識と行動の変化を内容分析した。

**結果：**導入前は、「場面に応じた個別の情報を捉える」「個別性に沿った子ども・家族のセルフケア/ケア能力をアセスメント」していた。導入後は、意図的な「セルフケア能力・ケア能力を引き出すための情報収集」と「必要な支援につなげるアセスメント」が事例検討会を行うことで検討・共有されていた。また、オレム理論の標準看護計画に沿って展開され、実践後、子どもや家族の変化を捉え、評価につなげていた。一方、急性期や周手術期の事例では、オレム理論を理解しつつも、看護過程における実践や評価の表現の難しさを認識していた。

**考察：**オレム理論の視点を取り入れた標準看護計画の電子化・導入に加え、事例検討会で、実践事例を部署内で共有・検討することで、セルフケア/ケア能力を意識した情報収集や看護展開に向けたアセスメントの重要性が認識されたものとする。一方、急性期の事例について、セルフケア理論を用いた看護展開例の検討が課題となっている。

## <引用・参考文献>

- 1) Orem, D.E. (小野寺杜紀訳) オレム看護論看護実践における基本概念、第4版、医学書院2005.
- 2) 片田範子、小児看護学、第1版、日本看護協会出版会、2005.
- 3) 近藤美和子、小木曾國子、塚越静江、田代弘子、渡部和子、岩崎鎮枝、根岸歳美、長谷川千晶、齋藤容子、久崎悦子、内田裕子、松永幸子、富永佐織、長場美紀、添田啓子、岡本幸江、三宅玉恵、田村佳土枝、西脇由枝、市川恵美、清水友歌、看護理論の臨床への適用；子どものセルフケア能力・家族のケア能力獲得を支援する看護実践能力向上の取り組み-埼玉県立小児医療センターオレム推進連絡会議の活動-、小児看護、33(13)、2010、pp1728-1733.
- 4) 前掲書3)
- 5) 田村佳土枝、添田啓子、近藤美和子、三宅玉恵、岡本幸江、西脇由枝、前田浩江、北村麻由美、伊藤美佐子、田代弘子、渡部和子、齋藤容子、秋山桜子、親のケア能力・子どものセルフケア能力獲得を支援する看護師の教育指導力の形成 集合形式ワークショップにおける教育介入とその効果、保健医療福祉科学、3、2013、pp 69-75.
- 6) ドナルド・ショーン、佐藤学・秋田喜代美、専門家の知恵 - 反省的実践家は行為しながら考える、ゆみる出版、2001.
- 7) 東めぐみ、看護リフレクション入門、ライフサポート社、2009.
- 8) 山勢博彰、伊藤美佐子、黒田裕子、他、電子カルテ

システムの有用性に関する臨床看護師の認識・看護診断、12(1)2007、27-34

- 9) 豊田久美子、馬込武志、平英美．電子カルテ導入後の看護行為変化および電子カルテ化の進展に対する看護師の認識．日本看護学会論文集、看護管理、42、2012、530-533
- 10) 佐久間雅子、櫛野節子、澤江美佐江、他、看護職者の看護記録に対する認識と看護記録が書きにくい理由に関する実態調査、日本看護学会論文集、看護管理 33、2006、161-163
- 11) 滝島紀子、看護記録監査、日総研出版、2013．
- 12) ダネル・スティーブンス、アントニア・レビ、佐藤浩章監訳、大学教員のためのルーブリック評価入門、玉川大学出版部 2014．

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

田村佳士枝、添田啓子、近藤美和子、三宅玉恵、岡本幸江、西脇由枝、前田浩江、北村麻由美、伊藤美佐子、田代弘子、渡部和子、齋藤容子、秋山桜子、親のケア能力・子どものセルフケア能力獲得を支援する看護師の教育指導力の形成 集合形式ワークショップにおける教育介入とその効果、保健医療福祉科学、査読有、3、2013、pp.69-75.

[学会発表](計4件)

添田啓子、望月浩江、松本宗賢、田村佳士枝、櫻井育穂、西脇由枝、勝本祥子、黒田京子、久保良子、株崎雅子、近藤美和子、岡崎智美、オレムセルフケア理論を取り入れた看護実践を促進する教育介入の効果 リフレクションから捉えた看護実践の変化、日本小児看護学会第26回学術集会、H28.7.24、別府市

櫻井育穂、田村佳士枝、望月浩江、添田啓子、西脇由枝、松本宗賢、勝本祥子、岡崎智美、株崎雅子、近藤美和子、馬場美紀、久保良子、黒田京子、オレムセルフケア理論を取り入れた実践を促進する看護記録監査表の作成、日本小児看護学会第26回学術集会、H28.7.24、別府市

近藤美和子、株崎雅子、岡崎智美、久保良子、黒田京子、添田啓子、望月浩江、松本宗賢、田村佳士枝、櫻井育穂、西脇由枝、勝本祥子、オレムセルフケア理論を取り入れた事例検討会の成果 事例検討内容と参加者の認識の変化から、日本小児看護学会第26回学術集会、H28.7.24、別府市

櫻井育穂、添田啓子、勝本祥子、西脇由枝、田村佳士枝、望月浩江、松本宗賢、株崎雅子、近藤美和子、渡部和子、久保良子、伊藤美佐子、親のケア能力・子どものセルフ

ケア能力獲得を支援する看護師の教育指導力の促進 平成24・26年度意識調査結果から捉えた看護師の看護過程の変化、日本小児看護学会第25回学術集会、H27.7.26、千葉市

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

添田 啓子 (SOEDA KEIKO)  
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授  
研究者番号：70258903

(2) 研究分担者

田村 佳士枝 (TAMURA KAJIE)  
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・講師  
研究者番号：60236750

西脇 由枝 (NISHIWAKI YOSHIE)  
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授  
研究者番号：90132175

井上 ひとみ (INOUE HITOMI)  
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・教授  
研究者番号：50295169 (H25)

櫻井 育穂 (SAKURAI IKUHO)  
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・講師  
研究者番号：30708516

望月 浩江 (MOCHIZUKI HIROE)  
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・助教  
研究者番号：50612595

北村 麻由美 (KITAMURA MAYUMI)  
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・助教  
研究者番号：60644474 (H25)

松本 宗賢 (MATSUMOTO MUNENORI)  
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・助教  
研究者番号：10736482 (H26 H27)

勝本 祥子 (KATSUMOTO SHOKO)  
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・助教  
研究者番号：50742433 (H26 H27)

(3) 研究協力者

黒田 京子 (KURODA KYOKO)  
埼玉県立小児医療センター看護部

久保 良子 (KUBO RYOKO)  
埼玉県立小児医療センター看護部

宇津木 正代 (UTUKI MASAYO)  
埼玉県立小児医療センター看護部

松井 洋子 (MATSUI YOKO)  
埼玉県立小児医療センター看護部

株崎 雅子 (KABUSAKI MASAKO)  
埼玉県立小児医療センター看護部

岡崎 智美 (OKAZAKI TOMOMI)  
埼玉県立小児医療センター看護部

近藤 美和子 (KONDOU MIWAKO)  
埼玉県立小児医療センター看護部

伊藤 美佐子 (ITOU MISAKO)  
元埼玉県立小児医療センター看護部 (H25 H26)

渡部 和子 (WATANABE KAZUKO)  
埼玉県立小児医療センター看護部 (H25 H26)

長場 美紀 (NAGABA MIKI)  
埼玉県立小児医療センター看護部 (H27)